

自主自活の女性育成を校是に

溝部学園立ち上げの記

相良範子著「MYWAY」より

三重野 勝 人

はじめに

別府市には、郷土で立ち上げられた高等教育機関が二校ある。別府大学と溝部学園がそれである。現在新たに立命館アジア太平洋大学（APU）が加わって別府市も学園文化都市としての雰囲気醸しつつあるが、この時期に、前記二校誕生までの苦闘の歴史を振り返るのも学園文化都市別府発展のために意味あることであろう。まずは溝部学園の草創の歴史を相良範子理事長の著書「MYWAY」自主自活できる子女の育成を目指して」に基づき辿ってみよう。

一 高等技芸学校創設と溝部ミツエ

溝部家と溝部ミツエの生い立ち

学園創立については相良範子が「学校法人溝部学園は、母

ミツエが昭和二十一年に創立した別府高等技芸学校に始まり」と記しているように、範子の母、溝部ミツエが戦争直後の昭和二十一年（一九四六）に別府高等技芸学校を創立したことに始まる。

溝部ミツエは、明治三十三年御越町（現亀川）の溝部四一、セイ夫妻の二女として誕生した。溝部家は、「紀家を祖先とする名門の家柄」とされるが、豊岡に三五町歩（ヘクタール）の土地、亀川に二七軒の貸家を持ち、当時四一は、速見郡会議員を務め、また御越銀行の大株主でもあった。

ミツエは、長じて日出美科高等女学校（後日出高等女学校・現暘谷高校）を卒業後、東京九段の和洋女子専門学校（当時和洋裁縫女学校・現和洋女子大学）に進学した。当時女子が高等専門学校に進学することは稀有のことであった。しかし、まもなく姉の死で中退し帰郷、石垣小学校に教鞭をとり、結婚で退職した。

一家倒産・離婚とミツエの人生選択

昭和四年の世界恐慌の波及によって御越銀行が倒産したことが一家の運命を大きく変えた。ミツエは離婚を余儀なくされ、一子範子を残して再度、和洋女子専門学校の門をたたくことになった。

「教育で身につけた知識や技術の資産は、他人から差し押さえられたり、他人が持っているとしても持って行けるものではない。特にこれからは、女性がかかかって一人になっても、生活ができる技術を身につける必要がある。」と考えたことが再挑戦の動機であったという。離婚と倒産がミツエに決意を促したのであるが、ここに別府高等技芸学校創設の原点があったと考えられる。

ミツエは、和洋女子専門学校を卒業後、京都府立女子専門学校教授として教職に携わったが、敗戦により学校が休校となったため、昭和二十年郷里亀川に帰郷した。

「自主自活する女性の育成」を目指し別府高等技芸学校創設

ミツエの帰郷が知れると、かつての教え子たちが「先生、洋裁・和裁を教えて下さい」と集まるようになった。戦後のこととて、戦争未亡人や生活苦に何とか活路を見出したいと願う女性たちも加わり、その数はたちまち四〇人を超えた。このため現住居では手狭になり、湯の森から竈門神社の下にあった炭鉱主、宮田氏所有の別荘（三〇〇坪）を購入し、そこに移転した。

裁縫技術習得を願う女性の増加するのを目前にしたミツエは、「生徒達をこのままにしては京都に戻ることは出来ない」

と、京都府立女專教授の地位を捨てることを決断した。

ここに、女性に技術を習得させ、「自主自活する女性育成」を目標とする、別府高等技芸学校が誕生することになった。時に、昭和二十一年四月吉日のことであった。

物不足の中のスタート

校舎は自宅、机は長机、材料は足らず、アメリカ兵のワッペンを刺繍で作ったり、着物をといてロングスカートに直すなどの工夫をする。貧しい農家の生徒には、月謝を野菜や米で納めることを認める。戦争未亡人で授業料を納付できないものはそれを免除。家庭の事情で子連れで学ぶ生徒には学校の事務員や手隙の人で子供の世話をする。すべて物不足の現実に対応した学校経営を余儀なくされた。

そのような状況の中、ミツエは離婚生活の経験者であった



自宅（旧宮田別荘）を開放した別府高等技芸学校

こともあり、戦争未亡人にはことさらに熱心に技術指導をした。通常三年課程のところを二年で習得させ、中には一年で終え、卒業して裁縫で生計を立てる生徒もあった。

二 新制女子高等学校の創設

新教育制度のスタートと新制女子高等学校の創設へ

学園は、「単に裁縫技術を習得させるだけでなく、高等女学校と同じように一般教養を身につけさせる」事にも力点を置くべきだ、というのがミツエの考えであった。

早速茶道・生花などの技芸習得を生徒に課すこととした。このことが卒業生の技術の信頼度とあいまって学校の評判を高め、生徒数も三〇〇名を超えるようになった。

校舎の手狭になったのを継ぎ足しては対応しつつあった折も折り、昭和二十三年、六・三・三制の新学制が施行された。

高等技芸学校では、高校卒業資格は取得できない。県内各地からの志望者は増加の一途をたどる。世論の動向から考えでも高校新設は緊急の課題となった。

参議西郷吉之助氏所有の塩田購入

新制高校の創設には文部省の指示で、生徒一人当たり一

四坪の土地が必要であった。新制高校用地の確保が緊急の課題となった。

時に現溝部学園の土地に

は、かつて参議院議員の西

郷吉之助氏経営の「南山製

塩」という会社があり、良

質の塩を製造していた。し

かし、海外からの安価な製

塩の輸入に対抗できず倒産

し、其の跡が空き地になり、

しゃれた南洋風の小屋が建っていた。

ミツエはこれを手ごろの値段で購入し、さらに隣接の蓮田

も買い取って校地にあてた。用地買収・校舎建築費用計六五

〇万円は、三〇〇万円を銀行から、三五〇万円は、現有の土

地・校舎とその他資産を処分して当てた。資産の中には、先

祖代々の家宝であった朝鮮李朝の壺や、有田その他の焼き物

など、高価な骨董の品々があったがただ同然で手放した。

整地救いの神・浜田区青年団

買い取った校舎建設地は、地名を「地獄田」と呼び、地面



南山製塩跡地（現校舎所在地）

を掘るとすぐに九十七Cの高温の温泉が湧きでた。西郷氏は、この温泉を鉄管に通して、海水を早く蒸発させるのに利用していたという「地獄田」の名そのものの土地であった。

当時は、整地作業に使うブルトローザなどの重機は少なく、また土木・建設業者も少数で、整地を請け負う業者もいなかった。ミツエは、在校生や父兄にお願いして整地にかかったが、「地獄田」の悪条件もあって、整地は遅々として進まなかった。

時に、地元の浜田青年団から、「地元で高校が出来るなら喜んで何か手伝いたい」との申出があり、ミツエを狂喜させた。

ミツエは高等技芸学校の校長・教諭を兼務していたほかに、地域社会でも、亀川の連合婦人会長や母子福祉会長を務めていたので、このようなミツエの献身的な生き様が地域の人々に評価されたのかもしれない。浜田青年団の助勢により整地作業は一気に進んだ。この助勢は学園にとってまさに神の恵みともいうべきものであった。

別府女子高等学校創立と栄養学の導入

昭和三十一年四月、苦勞が報われて別府女子高等学校が誕生した。内籠の自宅に高等技芸学校が設立されてから一〇年

の歳月が流れていた。

ミツエは、創設した高等学校の家庭科の中に裁縫技芸と並んで栄養学を取り入れ、女子教育の一層の充実を図ろうとした。このために娘範子に管理栄養士の資格取得を勧め、範子は主婦業の傍ら大学に通いこれを実現した。

一子溝部範子（現理事長）の参画

このあたりから、娘範子が学園建設について次第に大きな役割を果たすようになった。範子の生い立ちについて略述しておく。

範子の母ミツエは、昭和初年の頃、豊後高田出身の武雄と結婚した。しかし、昭和恐慌で父が倒産した際、入り婿が負債を背負うことを潔しとしなかった父の意を汲んで、ミツエは範子懐妊を伏せて夫と離婚した。

当時の住所は亀川中央町、亀川郵便局の隣の亀川館という劇場の側で、祖母がお菓子屋を営んでいた。範子の名付け親は、住居の離れに住んでいた後藤子白で、日出藩家老で学者の帆足万里の弟子と云われた人物であった。

範子は西光寺にある幼稚園に通いながら、この子白から四書五経や習字を習いながら幼児を過ごした。母が和洋女子専門学校に入学したのはこの頃で、範子小学二年の時に卒業し

た。卒業後は高田、大分第一高女の教員を務めたので、母子水入らずの生活は望むべくもなかった。

亀川尋常小学校を卒業した範子は、昭和十四年大分第一高等女学校に進学した。この時だけは母と並んでの登校であった。

女学校卒業後の進路について母と衝突した範子は進学を止め大分合同銀行に就職した。太平洋戦争たけなわの時期であった。

終戦直後の昭和二十年八月二十日、範子は亀川海軍病院（現国立亀川病院）の歯科医師相良好仁と結婚した。一九才であった。奇しくも先々、溝部学園充実発展の糧となる良縁であった。

三 ミツエ終生の事業となった

女子短期大学の創設

範子は技芸学校の事務などに携わっていたが、この資格取得により、高等学校の授業をも担当することになった。溝部範子（現理事長）の将来における学園経営参画の始まりであった。

女子高等学校の運営も多忙の中順調に推移したが、ミツエは、「自主自活する女性の育成」を仕上げるためには、さらに進んで女子高校にある専攻科を短期大学に昇格させることを考えていた。父兄からの強い要望もあった。

多額の資金、教職員の確保、文部省への申請書の作成と、ミツエ母子に夫相良も加わり文字通り寝食を忘れて奔走、昭和三十八年九月に申請書提出にこぎつけた。

ミツエが倒れた。申請書提出を終えた出張の帰途であった。急遽東大病院で検査したが、病名は悪性腫瘍で余命六ヶ月とのことであった。病状の小康を待って九州大学別府温研病院に転院し、懸命の治療の結果病状も快復した。

昭和三十九年四月二十日、待ちに待った別府女子短期大学



昭和38年 志高湖畔にて母・ミツエ(左)と文部省山本キク視学官

の第一回入学式が挙行された。ミツエは学長として臨席し、晴れの舞台上で祝福の式辞を述べた。二十年に喃喃とする苦節の年月を思い、万感胸に迫るものがあつたに違いない。

この年六月、ミツエは、全国手芸展審査委員として上京、仕事を終え帰宅後急に病気が再発し、八月三十日逝去した。六四年の生涯であつた。

若くして離婚し、一子範子を抱えての弛むことなき向学心、学園の創設整備への情熱。それを支えたのが「自主自活する女性の育成」という自らの体験に根ざした人生目標であつた。まさに後顧の憂いなき大往生であつたと言えよう。

四 現在の溝部学園

後継者相良範子夫妻

母ミツエの死は範子にとって大きな衝撃であつた。範子はその時の心境を次のように回顧している。

「母子家庭に育ち、母の背を見て育つた私が、覚悟していたとはいえ、母を失つた時の悲しみは筆舌に尽くしがたいものであつた。また今後の学園経営という重みを背負う重圧も、私の心に深く突き刺さつてきた。何も手に着かない状態が続

いた」。時に範子は三八才の若さであつた。

範子は理事長の重職を担うことになった。この時夫好仁は短大の学長と高校の校長に就任した。ここで相良好仁の結婚後の経緯について述べておこう。

昭和二十八年まで亀川国立病院に勤めていた好仁は、ミツエ母子の学園経営に邁進する姿を見て、何か自分なりに協力できることはないかと考えるようになった。結論は九州大学で衛生学を学ぶ専攻生になることであつた。実家である若松から通学してこれを習得するとともに、理科の教員免許も取得して、以後の学園経営に必要な不可欠の存在になつた。

新たな学園造り

継承者相良夫妻の手により、溝部学園はさらなる発展を遂げる。

昭和二十一年の別府高等技芸学校創設に始まつた学園も、新たに歯科技術専門学校、幼稚園、保育園が創設され、その基盤も磐石のものとなつた。創設者溝部ミツエの「人間として、女性として、自ら生きることのできる女性の育成」という建学精神を一貫して貫き通した建学の営みが、この偉業を支えたのである。